

実践・活動報告

椋山女学園大学看護学部が行政と連携しながら 地域貢献を目指した初期活動

The initial activity for regional contribution, which was cooperated with local administration,
in the Department of Nursing, Sugiyama Jogakuen University.

西村純子¹⁾ 早川幸博¹⁾ 粥川早苗¹⁾
池俣志帆¹⁾ 又吉忍¹⁾ 鍋島純世¹⁾

キーワード：地域包括ケアシステム, 地域貢献, 学生ボランティア, 地元の行政

Key words: integrated community care system, regional contribution, student volunteer, local administration

抄 録

椋山女学園大学看護学部の教員が行政と連携し、二つの取り組み「はいかい高齢者おかえり支援事業の模擬訓練」、名古屋市千種区内の市営住宅における「介護予防モデル事業のいきいき百歳体操」にて活動することができ、地域貢献を目指した初期活動を行うことができた。また、これらの事業には、教員と行政との連携の基で、学生ボランティアが参加することができ、学生ボランティアは高齢者との交流やふれあいを通して学びを深めることができた。

この活動を通して、学部と地元行政とが繋がっていく見通しを持つことができたが、今後も地元の行政と繋がって地域貢献したいと考えている。学生ボランティアの育成強化や、学生の成長を支援するための教員の関わり方等の課題も明確となった。

I. はじめに

大学における「地域連携事業の推進」は、椋山女学園大学（以下本学とする）においても推奨されているところである。本学看護学部では個別の活動はあるものの、行政との組織的な連携には至っていない現状であった。今回、行政との連携による大学との繋がりを目指したのは、平成29年度看護学部カリキュラム改正による課題探究実習が契機となった。

課題探究実習の目的は、課題探究を通しての看護実践力の向上であり、その目標は関連領域から探究したい課題を見出すことであった。在宅看護学領域での実習テーマは、厚生労働省が推進している『地域包括ケアシステムの構築』（厚生労働省、2013）

における看護職の役割を理解し、その課題を考察することとし準備を進めていた。その中で、他領域においても地域包括ケアシステムを課題とし準備していることを共有する機会があった。これを契機に教員のゼミ活動として、地域包括ケアシステム構築の一端を担えないか模索することとなった。また、地域連携を行う際に重要視した点は、『地元の大学は地元の行政と繋がって地域貢献したい』ということであり、専門基礎領域、公衆衛生看護学領域、在宅看護学領域、老年看護学領域の教員で活動を行った。教員による活動の発足当初は、行政とどう向き合い繋がっていけるのか、なかなか見通せず模索が続いたが、関係性を一つ一つ繋いで、学生ボランティアの派遣を通じて行政と連携し、二つの事業に参加す

受理日：2019年2月10日 採択日：2019年12月17日

¹⁾ 椋山女学園大学看護学部看護学科

るに至った。

以下、行政との事業に繋がるまでの活動を振り返り、本学における活動が地域と連携し地域貢献に至るまでの実践活動を報告する。

II. 行政に繋がるまでの活動

本学は、名古屋市千種区に根付いて 100 年以上の歴史を誇る私立女子総合大学である。看護学部は開設 8 年目であり、地域連携事業と言えるほどの実績がなく、特に行政との繋がりはなかった。

筆者は平成 27 年度から 3 年間、公衆衛生看護学実習科目担当者（行政）として、千種保健所で実習指導を通して保健師との面識ができ、地域活動を身近に知る機会となっていた。教育機関と行政が連携し、地域貢献を行うためには、信頼関係の構築が重要であったが、保健師の臨地実習以外での関係がなかったため、困難な状況であった。

1. 教員による活動の開始

『地域包括ケアシステムの構築』は、各領域の

共通のキーワードであった。課題探究実習を組み立てるために、ゼミ担当教員は、思い通りの施設とコンタクトを取り実習先確保に努めた。その一つが地元千種区の地域包括支援センター（以下いきいき支援センター）であった。

教員による活動の開始前に、筆者は保健師として公衆衛生看護活動を実践していた人的つながりがあったため、千種保健センターとの連携を事前に相談していた。4 月上旬に教員が集まり、今後の活動に向け話し合いがされた。その中で、行政との初期調整役を筆者に託された。行政に繋がっていった経過を表 1 に示す。

1) 名古屋市社会福祉協議会から情報収集

最初の頃の筆者らの関心は認知症カフェの開設にあったため、統括部署である名古屋市社会福祉協議会本部の「認知症相談支援センター」に相談した。その結果、担当者から①本学がネットワークの一つになることはありがたいこと、②学生支援としての教員の活動は他大学でもいくつか実践事例があるこ

表 1 行政と連携した事前準備活動の経過

時期	関係機関	事業に関する根拠等
4/10	第1回教員による会議（発足）	
4/13	名古屋市社会協議会 「認知症相談支援センター」	千種区認知症地域連携の会
4/26	千種区福祉部福祉課 地域包括ケア推進担当主査	第7期「名古屋市高齢者保健福祉計画・介護保険・事業」（はつらつ長寿プランなごや 2018） ・千種区地域包括ケア推進会議 ・千種区認知症専門部会 ・千種区介護保険事業所連絡会（訪問看護部）
5/24	事前打合せ（大学の意向確認） 千種区役所（関係部） 東部いきいき支援センター 福祉課地域包括ケア推進担当主査 保健センター保健師 東部・西部いきいき支援センター	・認知症サポーター養成講座 ・介護予防モデル事業（運動） 「いきいき百歳体操」 ・はいかい高齢者おかえり支援事業 認知症高齢者模擬訓練
5/31	本学看護学部のボランティア参加意向 市営住宅 A 住民説明会（現地）	・市営住宅等における住民主体のネットワークづくりモデル事業

とについて情報を得た。実践事例での教員の役割は、教員主体ではなく、教員が学生のボランティア活動を支援することであった。本学が認知症に関する活動を地域で実践する場合、千種区の『認知症専門部会』を統括している区役所の福祉課主査との相談を勧められた。千種区は、『千種区認知症地域連携の会』を保健師の地域活動として研究発表しており、その後の地域活動から発展し、平成16年【厚生労働省のモデル事業】の3年間を経て現在に至っていることを承知していた。現在では、地元医師会をはじめ、多くの地域の関係組織が繋がり、定期的な専門職向け研修会をボランティアとして月1回開催している。

このため、筆者は地元の大学の看護学部として、その連携の輪に入って活動する意義を以前から強く意識していた。

2) 地域包括ケア推進担当主査との繋がり

主管である千種区福祉部福祉課の地域包括ケア推進担当主査に連絡を取り、相談した。おりしも平成30年度から名古屋市は、全市16区が「保健センター」となり、保健師1人は専任で福祉課兼務となり、『地域包括ケアシステム』を推進する体制となった。このことは、地域包括ケアシステムの構築に、行政の保健師が厚生労働省健康局長通知による『地域における保健活動』を根拠に、本格的に推進する体制になったと理解した（厚生労働省、2013）。教員の中では当初、大学独自の地域連携事業も模索していたが、場所の確保や予算化等が容易ではなく、まずは行政との連携を目指すことにした経緯がある。

地域包括ケア推進担当主査と相談した結果、三つの提案がなされた。一つは「はいかい高齢者おかえり支援事業の模擬訓練」、二つ目に「ふれあいいきいきサロン」、三つ目に区内の市営住宅Aにおける「介護予防モデル事業のいきいき百歳体操」であった。その後、区役所から学生主体によるイベント開催の提案があった。その事業にはいきいき支援センターの参加希望の意向があるとの連絡も入った。

3) 学生ボランティアを通じた地域貢献の方向性

行政と本学教員とのやり取りの背景には、『千種区地域包括ケア推進会議』を踏まえた提案が多いこ

とは行政組織として当然なことであった。地域包括ケア担当主査と面談後に担当者間で検討し、その後本学と行政とのすり合わせ会の要望があった。しかし、教員が活動を行うためにはまだ情報収集が不十分な段階であり、5月下旬に本学において事業関係者と話し合うこととなった。会議には、「介護予防モデル事業」を実際に企画し支援していく千種区役所の地域包括ケア推進担当主査をはじめ、保健センターの保健師・東部いきいき支援センターの所長・事業の主担当者が来所した。内容は、地域サロンでの自治会長の思いを受け止め、地区診断結果を踏まえた住民の主体性を引き出しながらの『自助』・『互助』を支援する介護予防を目指す『住民主体のネットワークづくり』のモデル事業であった。これは公衆衛生看護の領域では、「地域における保健師の保健活動指針」に合致した予防的活動への取り組みといえる。このモデル事業に本学がどうかかわる意向であるかが問われた。

結果的には、本学看護学部が地域貢献できることは、この活動を十分理解し、学生ボランティアを派遣することで『地域包括ケアシステムの構築』において、地元の大学として連携の輪に加わることを考えた。そして、学生ボランティアは、高齢者との交流やふれあいを通して学びを深めることができる。そこでの教員の姿勢は、住民の主体性を尊重するとともに、行政の意向を踏まえてかかわっていくことが求められた。

以上の経過から教員による活動は、三つの提案を受け、「いきいき百歳体操」と「はいかい高齢者おかえり支援事業における模擬訓練」の二つに絞り、学生ボランティアを参加させて取り組むこととした。これらの調整を進めると同時に学生ボランティアの有効性について先行研究で確認した。そこには「活動を通して人々や地域の理解を深め、看護職への意欲を高め、活動に対する責任や社会性が高まること」や、「コミュニケーション力が高まること」が報告されていた（香春、田代、& 及川、2005；小林、赤石、& 松本他、2013）。このことから、地域連携に学生ボランティアを派遣することは、普段の授業では体験できないものであり、学生にとって大きな支援につながると考えた。特に昨今は、コミュニケーション力に課題を持つ学生が少なくなく、ボ

ランティア活動の有用性を改めて強く感じた。また、教員の役割としては、直接住民に支援する方法もあるが、行政との連携に学生ボランティアを導入することも、大学の地域貢献の在り方であると改めて意義を確認した。

Ⅲ. 社会連携センターとの繋がり

教員による活動を開始し、行政との連携事業の見通しが持てたことを第一段階とした場合、第二段階は、本学の社会連携センターとの繋がる意義の確認であった。看護学部は新しい学部のため、大学組織の役割を踏まえた活動が弱いと感じていた。このことから、次の段階に備えた活動に繋げようと筆者と粥川教授で社会連携センターに相談した。その役割は①～③の通りであった。

- ① 大学と行政が「連携の覚書協定」を交わす意義は、個人ではなく、大学教育の一環として実施することで他教員が広く活動を認識することになる。
- ② 学生にとって公的な「地域ボランティア」に参加することに安心感を持つ。教員も取り組みやすい面がある。
- ③ 教員の活動が本学看護学部の「広報」としての役割がある。

以上から、学生ボランティアの活動は、周到的計画の元に準備し、学部として本学社会連携センターを通した取り組みに繋げるよう、今回の活動の発展を目指すことも重要な視点であると考えた。

Ⅳ. 行政との連携事業の概要

行政からの提案を受け、「いきいき百歳体操」と「はいかい高齢者おかえり支援事業における模擬訓練」に取り組むこととしたが、その概要を以下に述べる。

1. 「いきいき百歳体操」について

市営住宅 A に住む高齢者が「いきいき百歳体操」に参加することで、行政が住民主体のネットワークづくりを支援し、住民同士の『互助』、そして『自助』にもつなげることを狙いとしている。その結果として、「いきいき百歳体操」によって

筋力を強化することにより、いつまでも自立し、買い物に行ける等 ADL を維持するような体力づくりを目指している。事業評価は、いきいき支援センターが、初期の 3 か月間毎週指導し、体操継続後の歩行速度と身体機能の評価等を行う。その後更に 3 か月ごとに評価し、1 年後は住民の自主運営に移行する計画である。

2. はいかい高齢者おかえり支援事業における模擬訓練

この模擬訓練の主管は、社会福祉協議会の委託事業で、いきいき支援センターが実施しており、「はいかい高齢者おかえり支援事業」の活動の一つである。いきいき支援センターは、学生ボランティアが模擬訓練に参加する条件として、『認知症サポーター養成講座』を受講していることとした。この講座は、在宅看護学領域では、ゼミ担当学生 8 名がすでに課題探究実習で受講していた。加えて、筆者のゼミ学生は卒業研究のテーマを、「認知症サポーター養成講座受講後の活動」としていた。もう一人のゼミ生は、「認知症のかかわりに関すること」をテーマに取り組んでいた。このことからゼミ学生にとっては、研究テーマに関連した実践の機会となり、更なる学びに繋がると考え、この模擬訓練にボランティア参加を勧め、ゼミ学生より承諾を得た。なお、模擬訓練は本学にて行い、筆者ら教員 6 名が支援に加わることとなった。

Ⅴ. いきいき支援センターとの連携

いきいき支援センターとの準備活動の内容は、「いきいき百歳体操」と「はいかい高齢者おかえり支援事業における模擬訓練」の事業に学生が参加するための教員の打合せ会議や、学生のボランティア活動の日程調整等であった。はいかい高齢者おかえり支援事業における模擬訓練の打合せ会議は、いきいき支援センターが調整しているが、地域の認知症サポーターとして活動している方々の都合を考慮し、昼間の日程で会議を設定していたため、学生は講義や実習があり、すべてに参加することは困難であった。しかし、いきいき支援センターによる、学生が参加できるような日程の配慮によって、最終の会議には参加できた。

1. 「いきいき百歳体操」でのボランティア活動

新たな学生ボランティアの募集を検討したが、募集が夏休み期間に入り困難であったため、学内の学生ボランティアサークルに依頼しボランティア学生への募集を行った。学生ボランティアが「いきいき百歳体操」へ参加する意義としては、初回から3か月経過する評価の時期に派遣することで、参加者の継続意欲の動機付けになることや、参加者は学生との交流が楽しみとなる等、補完的役割を担うことができると考えた。また、教員は学生ボランティアが地域の事業に参加することで、地域活動を体験するとともに、地域貢献に繋がると考えた。

学生ボランティアの参加は、8月下旬市営住宅Aの集会所であった。住民の参加状況は、当初と比べ3か月近く経過し、参加数は日により増減するものの、新たな参加者も加わっており、参加者同志の交流も生まれていた。今回初めて学生ボランティアが参加することについては、自治会組織を通じて、各所にチラシが張り出され周知された。当日は、学生ボランティア3名と教員5名、住民20名と多くの住民が集まり和やかに交流が行われた（表2）。

2. はいかい高齢者おかえり支援事業における模擬訓練でのボランティア活動

この模擬訓練は、一回ではあったがゼミ生も教員と一緒に企画会議に参加し、訓練の概要を把握しての参加となった。教員の役割は、学舎利用の手続きや、他教員や学生への周知と、当日は参

加者の安全に配慮するとともに、主催者の対応のサポートであった。模擬訓練の参加者は約40名、主催の関係者約15名、学生3名（その内他大学学生1名）、教員6名が集まった。また、模擬訓練の場所は、本学部教室とキャンパスヤードを使用し、救護室を設置しての訓練となり、小雨の中、傘をさしながら4グループに分かれての訓練を行った。その訓練のプログラムの中で今回新たに警察署への通報が加わった。学生の感想としては、「グループに認知症のサポーター経験者がいて参考になった。また、刺激にもなった。認知症の人への声掛けも、警察への通報の仕方も難しかった」等であった。なお、主催する行政の代表者も参加され、教員グループと面識を持つ機会ともなり、行政と繋がったと実感した（表3、写真1、写真2）。

VI. おわりに

初めて行政との連携を目指して活動し、学生ボランティアも少人数ではあったが参加を得ることができた。この活動を通して課題も見えてきた。以下に活動の成果と課題について述べる。

成果としては、まだ地域包括ケアシステムに関する一部分であるが地元の行政と繋がったことである。そして、今後も学部と地元行政とが繋がっていく見通しを持つことができた。地域連携を進めていく上で大切にしたい点は、『地元の行政と繋がって地域貢献したい』ということであった。課題は、学生ボランティアの育成強化である。多くの学生が更にボランティア活動に参加する機会を作り、自ら成長できるように支援することも教員の役割であるこ

表2 「いきいき百歳体操」の学生ボランティア活動の内容

時期	プログラム	活動内容
8/9	教員と学生との事前打合せ	ボランティア活動の概要と役割分担等
	実施（発足から3か月経過） ・会場準備	グループを作るための机・椅子の移動等
8/23	・「いきいき百歳体操」 DVD スペシャルバージョン	「重りバンド」の装着手伝と運動を住民の方と一緒に実施
	・茶話会	グループに分かれてのふれあいと歌を一緒に歌って交流（ギター伴奏付き）

とを実感した。

特記すべき事項として、いきいき支援センターとの共同開催においてセンター長は、筆者のゼミ学生の卒業研究テーマ『認知症サポーター養成講座受講後の活動』というその研究動機に共感し、“行政と学生がコラボした訓練にしたい”と言ってくださり、企画段階から学生と参加させていただいた。筆者はその熱意に何度も励まされた。

千種区役所の関係者および東部・西部いきいき支援センターのご支援に感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

河原加代子. (2018). 系統看護学講座 在宅看護論. 東京；医学書院.

小林洋子, 赤石美三代, 松本明美, 他. (2013). ボランティア活動と自己省察の教育効果 自己教育力の発見. ヘルスサイエンス研究, 17 (1), 41-46.

香春智永, 田代順子, 及川郁子. (2005). ヘルス・ボランティア活動をしている看護学生の学習ニーズと学習支援の在り方. 聖路加看護学会誌, 9(1), 11-18.

厚生労働省. (2013). 地域における保健師の保健活動について.

https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tb9310&dataType=1&pageNo=1 (2019. 9. 1 閲覧)

厚生労働省. 地域包括ケアシステム.

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu (2019. 9. 1 閲覧)

厚生労働統計協会. (2018). 国民衛生の動向 2018/2019. 新オレンジプラン. 東京；厚生労働統計協会.

表3 「はいかい高齢者おかえり支援事業における模擬訓練」のボランティア活動

時期	プログラム	組織・関係機関
8/23	講話：「認知症の人への声かけ講座」 模擬訓練の実施（40分） ① 看護学部棟 ② 屋外 ③ キャンパスヤード グループワーク 千種警察署の話	・名古屋市社会福祉協議会本部 ・千種区役所福祉課 ・千種保健センター ・千種警察署 ・地域の模擬訓練指導者 ・本学看護学部の教員有志の会 ・学生ボランティア



写真1 認知症の人への声かけ講座



写真2 キャンパスヤードでの模擬訓練